

説教要旨「山から下りて」

ルカによる福音書6章12～19節

十二人の使徒たちが、イエス様の夜を徹しての祈りによって選び出され、任命されました。祈るイエス様の姿をしばしば語っているルカ福音書ですが、「夜を徹して祈られた」のは、今日の箇所と、もう一つ、捕えられる直前のいわゆる「ゲツセマネの祈り」のみです。そしてそのどちらでもイエス様は「山」で祈っておられます。

聖書において「山」は、しばしば神様と人が思い通わす神聖な場所として描かれます。出エジプト記でモーセが神様から十戒を授かったのはシナイ山においてでありました。詩篇 15 編にはこのように歌われています。「主よ、どのような人が、あなたの幕屋に宿り、聖なる山に住むことが出来るでしょう。」新約聖書においても同様で、イエス様は山で神に祈られるのです。本日の箇所にしてもそうですし、ゲツセマネの祈りもそうです。神様に近い場所、神様と交わる場所、神様に祈る場所、それが「山」なのです。

十二人を任命した後、17 節以下にイエス様の山の下での、多くの人々に対する働きが記されています。それはしかし、選び出した十二人がイエス様の手足となって働いた…ということではありませんでした。彼らが用いられていくのはもっとずっと先の話です。ここで描かれているのは、「山を下りて」人々との交わりに生きるイエス様の姿です。

イエス様は噂を聞きつけて押し寄せてきた人々から逃げるように人里離れたところに退いて祈られました(5:15)。しかし、そのまま山に、神様の近くに引きこもっておられたのではありません。山から下りて人々の所に立たれるのです。人々との交わりの中に身を置かれるのです。

イエス様は、私たちの手の届かない場所、神様のもとに留まるのではなく、私たちのすぐそばにおりたってくださいだったので。それが主イエス・キリストの歩みなのです。